

二〇一九年度 桐朋女子中学校入学試験 (A入試)

筆記試験(国語)

受験番号

氏名

【注意】

- 一、問題冊子が配られても、開いてはいけません。
- 二、問題冊子は1ページから19ページまであります。
- 三、「はじめなさい」と言われたら、まず、問題冊子の表紙と解答用紙二枚に、それぞれ受験番号と氏名を書きなさい。
- 四、答えは、すべて解答用紙に書きなさい。
- 五、問題冊子に書きこみをしてもらえません。
- 六、「やめなさい」と言われたら、すぐに筆記用具をおき、解答用紙も問題冊子も表を上にして、机の上におきなさい。
- 七、試験時間は四十五分です。

一、次の①～①⑤の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。また①⑥～②①の――線部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- | | | | |
|---|----------------|---|-----------------|
| ① | 自転車でシュツキンする | ② | こおったままユソウする |
| ③ | 絹のオリモノ | ④ | ハンガをかべにかざる |
| ⑤ | オーケストラのエンソウをきく | ⑥ | コンチュウの種類を調べる |
| ⑦ | 果物にふくまれるトウブ | ⑧ | セイリョクテキに働く |
| ⑨ | 国をトウイツする | ⑩ | 学校でシイク係をつとめる |
| ⑪ | カハンスウの票を得た | ⑫ | 少子化タイサクについて議論する |
| ⑬ | 卒業の記念にシヨクジュする | ⑭ | 山できのこをとる |
| ⑮ | ホソクして説明する | ⑯ | 青々とした竹の節 |
| ⑰ | 冬至にかぼちゃを食べる | ⑱ | 船が針路を変える |
| ⑲ | 読者に判断を委ねる | ⑳ | 高性能の魚群探知機 |

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。字数制限のある問いに答える場合、「、」や「。」等も一字と数えます。

北海道、羅臼沖^{＊らうすおき}を東におけてボートを走らせるぼくたちの左舷^{＊さげん}につらなるのは、初夏でも雪をいたなく知床半島の山やま。そのなかでひとときわ高い羅臼岳^{＊らうすだけ}の峻峰^{＊しゅんぽう}が、のぼってまもない太陽の澄んだ光に照らされています。

①この日は、他の船がまだ活動をはじめない早朝をえらんで、日の出直後から海にでてきたのでした。六月中旬^{＊ちゅうじゅん}とはいえ、北緯^{＊ほくい}四四度、羅臼沖の海上に流れる風は肌^{＊はだ}をさします。

海はないで、とろりと油を流したような海面が広がり、沖からのゆったりとしたうねりがぼくたちのボートをゆらししていきます。朝日に照らされてかがやく海にボートを走らせるのは、たとえようがないほどに心が満たされる思いがするものです。今日、これからどんな出来事に会えるのかと心がおどりますし、なにより目に映る万物^{＊ばんぶつ}が、朝の光のなかで今日一日を生きぬく活力を発散しているかのように見えるのです。

②そのとき、船の近くの海面に、黒く刃物^{＊はもの}のようにとがった先端^{＊せんたん}が現れたかと思うと、海面を切って進みながら、やがて剣^{＊けん}を天におけてつきあがるように吃立^{＊ききりつ}した背びれが姿を見せはじめました。次の瞬間^{＊しゅんかん}、息をふきあげる音と水しぶきとともに、黒く小山のような背が浮上^{＊ふじよう}してきます。

それにつづいて、まわりからもたてつづけに息をふきあげる音がひびき、いくつもの黒い背が海面を割りました。ぼくが乗るボートのすぐ近くの海面から、シャチの群れが浮上したのです。

間近に見るつややかな背は、水にぬれてなまめかしいほどの黒さを見せ、その上を海水が、太陽を映してきらめきながら流れ落ちていきます。そのなかで、波間に見える目の後方の白い模様がきわだ

って見えます。

海面につらなる背びれのなかで高くそびえるのは、群れのなかでもひとときわ大きな成熟したオスのもの。シャチのオスは成長すると、メスよりもひとまわり体は大きく、その背びれはニメートルほどの高さの勇壮なものになります。

それ以外の個体は、ひとまわりもふたまわりも小さいメスや子どもたちで、彼女たちの背びれはずっと低いものです。シャチは、つねに血のつながりのあるきずなの強い群れでいっしょに行動します。

海上には、シャチたちの噴気がたなびき、あたりの大気さえ白くかすんで見えます。そしてわたる微風が、生きもの特有のにおいを運んでいきます。

シャチは、ぼくたちと同じ哺乳類ですから、ふだんは海のなかを泳ぎまわっていても、ときどき海面にでて呼吸しなければなりません。長く肺のなかにとりこまれていた空気が、海面に浮上したときにはきだされると、急に冷やされて霧をつくります。

シャチをふくむクジラのなかまは、海面にでたとき、霧のように見える噴気をあげますが、これが潮ふき、すなわち彼らがきだした息です。そして、その直後、新鮮な空気をいっぱいに吸いこんで、なめらかな動きで海面下にしずんでいきます。

⑤ ふいに、一頭のシャチが海面をつきやぶって、巨体を宙におどらせました。背の黒と腹側の白がきわだったコントラストを見せ、そこから海水が銀色にかがやく滝になって流れ落ちていきます。

多くの巨大なクジラが、同様に海上に体をおどらせる行動を見せることがあります。体表についた寄生虫や古い皮膚を落とすためや、遊びのためなど、さまざまな意味あいが考えられますが、ほんとうの意味がわかっていないわけではありません。それにしても、何トン、何十トンもの巨体が宙に

もう光景は、それだけで見る者の目を圧倒^{あつどう}するものです。

シャチは、やがて巨大な水柱と水音をあげて海中に消えました。そのときにできた波が、いま目にした光景の余韻^{⑥ よいん}を楽しむおぼくたちのボートをゆらして、おだやかな海面をわたっていきました。

シャチをふくむクジラのなかまは、陸上生活をしていた哺乳類の一部が、いまから五〇〇〇万年前、新たな生活場所やエサを求めて海に入りこんだ動物たちが進化したものです。そのとき、海洋生活にあわせてさまざまに体のつくりを変えはじめました。

陸上を歩かなくなったために、後肢^{うしろあし}は退化し、前肢^{まえあし}は水をかいて水中でバランスをとったり方向を変えるための胸びれ^{むねな}に、尾^おは力強く水をけって進むための尾びれに形を変えました。シャチが巨体を宙におどらせたのも、この尾びれの力によるものです。そして体全体が、泳ぐときの水の抵抗^{ていこう}を小さくするために、流線形^{りんせん}の輪郭^{りんかく}をもつようになりました。

このときもうひとつ、鼻の穴の位置も変わりはじめました。多くの陸上哺乳類は、吻部^{*くぶんぶ}の先端に鼻孔^{こうこう}をもっています。こうすることで、敵やえもののにおいをまっ先にかぐことができますし、顔を上におければ、より高いところを流れるにおいを察知することもできます。

しかし、鼻の位置をそのままに海のなかを泳げば、呼吸のたびに顔を上におけてわざわざ鼻先を海面にださなければなりません。生活場所を海に移したクジラのなかまでは、数千万年にわたる進化のなかで、鼻の穴が後方にずれながら、頭の上に移ってきたのです。こうすることで、シャチをはじめクジラのなかまは、海中を高速で泳ぎながら、頭部や背を海面からだすだけで呼吸ができるようになりました。

いまシャチたちが噴気をあげ、その直後に息を吸いこんだのは、こうして頭の上に位置を移した鼻

孔にあたる穴（噴氣孔^{ぶんきこう}）からです。ちなみにその穴は、彼らが海中にもぐったときには、弁でしっかりと閉じるようになっていきます。

海面下にしずんだシャチの群れはそれほど深くはもぐっていないようで、船べりから海中をのぞきこむと、目の後方にある模様や下あご、腹部の白が暗い海中をかけぬけていくのが見えます。そして、ふたたびオスの背びれの先が海面からつきだしたかと思うと、巨大なオスが先頭にたって浮上して息をふきあげ、彼につづいて群れのなかまもつぎつぎに浮上しました。

シャチの群れは、浅い潜水^{せんすい}と浮上しての（^⑧）をくりかえしながら、ないだ海をゆっくりと進んでいきます。そして、彼らが海面を泳ぐときには、まわりのないだ海面のなかで、彼らが残す航跡^{こうせき}だけがざわめいて見えます。

黒い背をつらねて泳ぐさまは、まるで黒い巨波^{おきなみ}がわたっていくようにも見え、海面に立ち並ぶ背びれのさまは、背に棘^{とげ}をそなえた巨大な怪獣^{かいじゅう}がそこにいるかのようです。

やがてシャチの群れは、動きをそろえてそれぞれが海面に大きく背を盛りあげ、勢いよく海中に消えていきます。こうして深くもぐると、五、六分は海面に姿を見せません。その間ぼくたちは、海中を泳ぐシャチたちの動きを思いえがきながら、彼らがつぎに浮上しそうな海面においてボートを走らせるのです。

シャチ——オスでは体長九メートル、体重一〇トン、メスでは体長七メートル、体重七トンに達する、ハクジラのなかまです。ときには群れをなして、大きなクジラさえおそう光景が、昔から船乗りに目に目撃^{もくげき}され、「海のギャング」としておそれられてきた動物です。

⑨「A」一九世紀のデンマークの動物学者エシュリヒトが、一頭のシャチのおなかのなかから、一三頭のイルカと一四頭のアザラシの残骸^{ざんがい}が一度にでてきたと記述したことが、ギャング^グぶりに拍車^{はくしゃ}をかけたようです。

「B」、彼らの生態がくわしく調べられるようになり、（もちろんクジラをおそう群れもないわけではありませんが）魚ばかりを食べてくらしている群れがいることが知られるようになったり、家族のきずなが強く、子どもをいたわり育てる姿が観察されるようになって、人びと^⑩のシャチを見る目は大きく変わりました。

いまぼくたちがボートを走らせているのは、北海道、知床半島の付け根近くにある羅臼の町の沿岸ですが、この町にも、初夏を中心に頻繁^{ひんぱん}に沿岸に現れるシャチたちの姿を楽しむために、多くの観光客がおとずれるようになりました。

元来シャチは、北極の氷のあいだから南極の氷のあいだまで、世界中の海にすんでおり、日本近海でもときおり目撃されています。なかでもここ北海道の沿岸で野生のシャチが頻繁に観察されることは、以前から漁師さんや自然愛好家のなかでは知られていました。

しかし、知床半島沿岸にシャチが数多く生息することを多くの人にとりわけ強く印象づけたのは、二〇〇五年二月七日、羅臼の町から二〇キロメートルほど北東にある相泊^{あいどまり}の沿岸で、おしよせる流水に逃げ場^にを失ったシャチーく一二頭が閉じこめられ、そのうち九頭が氷で傷ついて死んだ出来事でした。

群れのなかには乳飲^{ちの}み子^ごもまじっており、おそらく大人たちだけであれば早い時期ににげさせたものの、子どもたちをかばったために、大人たちもまきぞえになったと考えられました。そして、そのことがさらに、人びとにシャチという動物の家族や群れのきずなの強さを印象づけることになったの

です。

(水口博也『世界の海へ、シャチを追え!』岩波ジュニア新書)

* 羅臼沖、知床半島、羅臼岳 —— 知床半島は北海道の北東につき出た半島で、羅臼岳はその中央にある山。羅臼沖はシャチやクジラを観察できる場所として知られている。

* 左舷 —— 船の左側のへり。

* 峻峰 —— 高く険しいみね。

* 屹立 —— 高くそびえ立つこと。

* 吻部 —— 口の部分。

問い一、 —— 線部①「この日は、他の船がまだ活動をはじめない早朝をえらんで、日の出直後から海にでてきたのでした」とありますが、この日の海の様子として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 風も静かで、ゆったりとした波がボートをゆらすおだやかな様子。

イ どんよりとしたくもり空の下、海面が黒々と見える様子。

ウ 勢いよくふく風に波が立ち、のぼったばかりの朝日がきらめいている様子。

エ 雪の残る寒々とした景色の中、波がやんで静まり返っている様子。

問い二、 —— 線部②「黒く刃物のようにとがった先端」とありますが、これは何の先端を指していますか。三字で答えなさい。

問い三、 —— 線部③「勇壮」の意味としてあてはまらないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 強くたくましい様子

イ 勇ましく意気盛んな様子

ウ たけだけしく雄大な様子

エ 巨大で成熟した様子

問い四、——線部④「ときどき海面にでて呼吸しなければなりません」とありますが、シャチは呼吸をしやすくするためにどのような進化をとげましたか。次の空らんにあてはまるように、本文中の語句を用いて十五字以内で答えなさい。

《「——という進化》

問い五、——線部⑤「ふいに、一頭のシャチが海面をつきやぶって、巨体を宙におどらせました」とありますが、これはシャチのどの部分の力によってできることですか。三字で解答らんに続く形で答えなさい。

問い六、——線部⑥「余韻を楽しむ」とありますが、「余韻」という語が正しく使われている文を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 夏の海水浴の余韻でまだ日焼けのあとが消えない。

イ 昔の恋愛映画を鑑賞した余韻でまだ夢見心地でいる。

ウ 昨日の台風の余韻でまだ交通が乱れている。

エ がんばってとび箱の練習をした余韻で筋肉痛になっている。

問い七、——線部⑦「そして、ふたたびオスの背びれの先が海面からつきだしたかと思うと、巨大なオスが先頭にたって浮上して息をふきあげ、彼につづいて群れのなかまもつぎつぎに浮上しました」とありますが、このように浮上したシャチが並んでいる様子をたとえた表現を本文中から五字でぬき出して答えなさい。

問い八、——線部⑧「（——）をくりかえしながら」とありますが、（——）にあてはまる言葉を二字で答えなさい。

問い九、本文中の空らん「A・Bにあてはまる言葉を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし同じ記号を二度以上答えてはいけません。

ア このように イ しかし ウ また エ さらに

問い十、——線部⑨「拍車をかけた」の意味としてふさわしいものを選び記号で答えなさい。

ア 勢いを加えた イ みがきをかけた ウ とどめをさした エ 目をかけた

問い十一、——線部⑩「人びとのシャチを見る目は大きく変わりました」とありますが、どのように変化したのでしょうか。人々のシャチに対する見方の変化を説明した次の文の空らんに適切な語句を入れなさい。IもIIも十五字以内とします。

《昔は

I

 が、今では

II

 動物だと思われる。》

問い十二、この文章の説明としてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 前半は筆者の体験した風景をえがいた場面が中心であり、後半はシャチの生態や歴史をふくんだ生物学的説明が中心の文章である。

イ シャチの群れが海面を泳ぐ光景が、臨場感あふれる比喩表現で魅力的にえがかれ、読み手をひきこんでいる。

ウ シャチの生態が、海で生活する哺乳類にとってなくてはならない変化をとげたことが実際の様子をえがきながら説明されている。

エ かつて多くの動物の天敵であったシャチが、おとなしく人なつこい性質に変化した様子がえがかれている。

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。字数制限のある問いに答える場合、「、」や「。」等も一字と数えます。

①「あら、しまったあ。うっかりしてたわ」

日曜日の夕方、チキン南蛮^{なんばん}を作ると言っていたおばあちゃんが、台所で大きなひとり言を言った。

「どうしたの？」

居間で洗濯物^{せんたくもの}を畳^{たた}んでいたわたしが、その場を動かずに聞くと、おばあちゃんは、わたしから見える所までやって来て、

「タルタルソースに使うマヨネーズ、切らしてた」

と、眉^{まゆ}の両端^{りょうはし}を下げた。

「買いに……、行こうか？」

わたしが言うと、おばあちゃんはにと笑った。

「はい、お願いします。トーコちゃん」

おばあちゃんの大きなひとり言は、わたしに聞かせるためだったようだ。

おばあちゃんからお財布^{さいふ}を預かり、洗濯物はそのままにして家を出た。

②すぐ近くにコンビニがあるからと、自転車ではなく歩いて出かけたのだけれど、店の前まで来ると気が変わって、そのまま行き過ぎた。

住宅街をしばらく歩いてから、地下にスーパーがある小さなビルの前の道路を渡^{わた}って、児童公園を通り抜^ぬけた。その先の道をまっすぐ進むと、穂香^{ほのか}の家がある。

日暮れにはまだ早いけれど、少しだけ夕方の匂^{にお}いがした。

③ 穂香の家は白いフェンスに囲まれて、いつものようにお行儀よくそこに建っていた。門を中心にした丸い形の花壇には、ネモフィラの青い花が満開だ。

金曜日の給食の時間、穂香に気持ちをぶつけてしまってからずっと、わたしの心はどんよりと曇っている。④

わたしが悪いのはわかっていたのに、あやまることができないまま、週末を迎えてしまった。昨日の千紘ちゃんとの買い物の間にも、「a」そのことを思い出しては、気持ちが重くなっていた。穂香とは、小学校から長い時間を一緒に過ごしてきた分、ケンカをしたことは何度もあった。けど、こんなに自分の言ったことを後悔したのは初めてだ。

できれば月曜日になる前にちゃんとあやまっておきたかったのだけれど、思い切って押したインターフォンに返事はなかった。駐車場に車がないから、きつと家族で出かけているのだろう。

⑤ がっかりしたような、少しほっとしたような気持ちで引き返し、児童公園の前にさしかかった時、後ろから誰かの足音が近づいてきた。

わたしの歩調よりもずっと速くて、どんどん背中にも迫ってくる。くっ、と息が詰まった。

このところ校区内での不審者情報が相次いでいて、学校でしつこいくらい注意されている。

周りには誰もいない。住宅街のどの家も、ぴっちりとは玄関の扉を閉めていて、たとえわたしが悲鳴を上げて、そこが開くことはなさそう。

とにかく逃げよう。足の速さに自信はないけれど、闘って勝つ自信はもつとないから、もうふり切るしかない。

そう思いながら地面を強く一歩だけ蹴った時、

「……セ……ヒロセ」

と、背中から吹く風に、わたしの名前が混じって聞こえた。

「ヒロセーコ！」

「ひえっ！」

「逃げんなよ、ひと筆書き」^{*}

「b」ふり返ったら、そこには北沢が立っていた。体を前に倒して両手で膝を押さえ、息を整えているようだ。

「やだ、やだやだ、もう、びっくりさせないでよ、不審者かと思ったじゃない」

「いやっ、なんで、不審者が、名前を知っていると、思っかなっ」

北沢の息は、まだ切れている。

「だって、突然現れたから」

「ああ、それは、ごめん」

「まあ……いいけど。それより、何してんの？」

「自主トレ、週末はいつもこの辺を走ってるんだ」

北沢はやっと体を起こし、普通にしゃべった。そういえば北沢の家は、穂香の家から一〇〇メートルくらいしか離れていない。

へえーと素直に感心していたら、北沢はわたしを追い越して児童公園の中へと入って行く。

「オレ、ちょっと休憩するよ」

黙ってその後ろ姿を見ていたら、北沢はふり返り、

「休んだら？ 広瀬も」

と言う。

休むも何も、わたしはただ歩いていただけなのだ。それに、急に家を出て来たから、着古したグレイのカットソーにデニムというひどい格好で、恥はずかしい。

まあしかし、せっかく誘よそってくれているのだからと思いなおした。

その公園は小さくて、木製のベンチ、ジャングルジム、そしてブランコしか置かれていない。座すわるとしたら、ベンチかブランコだろうと思うのだけれど、北沢はなぜかジャングルジムに登り、そのてっぺんに腰こしかけた。

しかたなくわたしも登り、一段下に座った。

やさしい風が、「c」吹いた。

「広瀬、どこかに行く途中とちゅうだった？」

「うん、穂香に用があったんだけど、留守るすだったから、帰ろうとしてたところ」

「ふうん。仲いいよな、広瀬と倉田って」

「うん……でもわたし、今はちょっと」

「え？」

「金曜日に、穂香に意地悪いじわるなことを言っちゃって、それをあやまろうとして行ったの、穂香んちに。でも留守だった」

「はあ」

北沢は、とくに興味もなさそうで、それ以上何も聞いてこなかった。だけど、わたしはもっと話したくなった。

「穂香、こないだ絵画コンクールで金賞とったでしょ？ わたし、ちょっとうらやましいっていうか、

なんか、素直に喜んであげられなかったんだ。それに、自分のことで頭がいっぱいだったから、いろいろ話しかけてくる穂香がうっとしくなって、八つ当たりしてしまってた」

「倉田って、金賞とったの？」

「とったじゃん。先生もそう言ってたし、新聞にも載^のってたよ」

「へえ、そうだったけ」

わたしは「そうだよ」と、ちよつと強い口調で言った。^⑥

自分は、穂香の受賞に複雑^{ふくざつ}な気持ちになったくせに、それを知らないと言われると、なんだか腹が立った。穂香はすごいんだよ、すごく上手に絵を描^かくんだよ、穂香には才能があるんだから、と大声で言いたくなった。

「北沢も、新聞に載ったことあるよね。県大会で新記録を出した時。全校集会で表彰^{ひょうしょう}されたし」

「うん」

「すごいよね、わたし、一度もそんなことないよ。読書感想文も、絵もスポーツも書道も音楽も、得意なことなんて全然無い。なんにも無いんだ、わたしには」

そう言うと、北沢は不思議なものでも見るみたい「d」わたしを見つめて、

「半紙くれたじゃん」

と言った。

「はい？」

「小学生ん時、オレ、何度も広瀬に半紙もらったよ。習字の時間、ほら、オレンちって母さんいなくて父さんだけだから、半紙とか絵の具とかを切らしても、なかなか気づいてもらえないんだよね。買っというって言っても、父さんすぐに忘れちゃって。まあ、オレ自身も忘れちゃうんだけど。で、授

業中に半紙がないことに気づいて、やべえやべえって思ってたなら、いつも「e」机に置いてくれたんだ。あ、もちろんオレにだけじゃなくて、みんなにそんなふうにしてたよな、広瀬」

そう言えば、そんなことがあったような気がする。北沢にお母さんがいないのは、いつから知っていたけれど……。

⑦「そんなつまらないこと、何年も覚えててくれたの？」

「オレには、つまらないことじゃなかったよ。あの時、すごく助かったし、嬉しかったから。絵の具だって何度も借りた。そのまま返してなくて、ごめんな」

「いや、いやいや、そんなのいいよ」

「だから」

「だから？」

⑧「なんにも無いなんて、思わないよ」

北沢はそう言っていると、弾みをつけてジャングルジムから飛び降りた。

それからぐんっと伸びをして、そのまま何事もなかったかのように、公園を走り出て行ってしまった。

なんだあれ、と思いながらわたしも地面に下りて歩き出すと、北沢が走って戻って来た。そして、「帰り道、気を付けて」

とだけ言うと、今度こそ本当に行ってしまった。

北沢の背中を包む夕暮れの空気は、淡いラベンダー色で、それはママが受賞式の写真の中で着ていたスカートの色そっくりで、なぜだかわたしは泣きたくなった。

「おはよう」

月曜日の朝、穂香の家の前で待っていたわたしは、玄関から出て来た穂香に駆け寄った。

小学生の時には毎日一緒に登下校をしていたけれど、中学校に入ってから別々に行っていたから、穂香は「f」驚いたようだった。

「どうしたの？」

穂香の声は、冷たかった。いつもなら「わあっ、おはよう」と言うのと同時に丸い目を三日月のカタチにして笑うのに、その日はそのまま歩き始めた。

二、三步遅れて、わたしは穂香のあとを追った。

「ごめん、穂香」

声をかけても、穂香はふり返らなかった。ただ、

「何が？」

と、わかっているはずのことを聞いたただけだ。

「金曜日のこと」

「……………」

「ほんとにごめん」

そう言うと、穂香はようやく立ち止まってふり向いた。わたしも足を止めると、穂香は、

「あのさー」

と言って、わたしをまっすぐに見た。

「トーコの気持ちを考えずに、[g]しゃべってたわたしも悪かったと思うよ。でもトーコ、何も言ってくれないんだもん。部活に戻らない理由とか、家のこととか。何か悩んだり気になることが

あったりするんなら、話して欲しいよ。あんなふうに突然キレられたら、わたし、どうしていいかわかんなくなる」

いつもはベビーピンクの頬ほほが、今はただ白いばかりに見える。わたしは、穂香から目をそらさないまま、

「うん、わかった」

と頷うなずいた。ドキドキ鳴っていた。

「ほんとに？」

「うん」

「じゃあ、もうしません、は？」

「はい。ごめんなさい、もうしません」

わたしが大げさに頭を下げると、ようやく穂香は「ふっ」と笑った。わたし⑨の体から、力が抜けた。

「もういいよ、行こう」

そう言った穂香に、わたしは追いついて並んだ。そして、

「……あのね、悩んだのはパパのこと。こないだパパから電話があって、わたしに会いたいって言い出して……」

と話し始めると、穂香は、

「ちょ、ちょっと待って」

と、両掌りょうてのひらをわたしに向けた。

「その話、思ったよりヘビーな気がする。心の準備するから、ちょっと待って」

「えー、穂香が話せて言ったんじゃない」

⑩「そうだけど……。うん、そうだ、話して」
そうして穂香に話してみると、ほんの少しだけ、気持ちが軽くなったような気がした。

(中山聖子『その景色をさがして』P H P 研究所)

*ひと筆書き——北沢はトーコの顔を「ひと筆書きで描^かけそうだ」と言ったことがある。

問い一、——線部①「あら、しまったあ。うっかりしてたわ」は、だれがだれにどのような意図で言った言葉ですか。解答らんに合うように答えなさい。

問い二、——線部②「気が変わって、そのまま行き過ぎた」とありますが、どのようなことをしようと思いついて行き過ぎたのですか。十五字以内で説明しなさい。

問い三、——線部③「穂香の家は白いフェンスに囲まれて、いつものようにお行儀よくそこに建っていた」、——線部④「わたしの心はどんより曇っている」のような表現技法を何といいま
すか。次の中から適切なものを選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 倒置法^{どうちほう} イ 擬人法^{ぎじんほう} ウ 暗喩^{あんゆ} エ 体言止め

問い四、——線部⑤「がっかりしたような、少しほっとしたような気持ち」とありますが、このとき
の気持ちを説明した次の文の空らん^{らん}に適切な語句を入れなさい。

《穂香に会うことができなかったのがっかりしたが、
少しほっとしたような気持ちになった。》
ので、

問い五、文中の空らん^{らん}【 a g に入る適切な語をそれぞれ選^えび記号で答えなさい。ただし同じ
記号を二度以上答えてはいけません。

ア ちよっと イ すっと ウ じっと エ へらへら オ おそるおそる
カ ふわっと キ ちらちらと

問い六、——線部⑥「ちょっと強い口調で言った」とありますが、このときの「わたし」の気持ちを、
を、「北沢」「穂香」「才能」の三つの言葉を必ず入れて説明しなさい。

問い七、——線部⑦「そんなつまらないこと、何年も覚えてくれてたの？」について、以下の問いに答えなさい。

(1) この「つまらないこと」とはどのような意味ですか。ふさわしいものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 面白くないこと イ 取るに足らないこと ウ ささいなこと

エ 忘れていたこと オ 不思議なこと

(2) この時の気持ちとしてあてはまらないものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 驚き イ うれしさ ウ とまどい エ おそれ オ いらだち

問い八、——線部⑧「なんにも無いなんて、思うなよ」とありますが、この後に続きがあるとしたら、北沢は「わたし」にどのようなことを言うと考えられますか。「広瀬は」から始めて、「できる」という言葉を必ず入れて、セリフを作りなさい。

問い九、——線部⑨「わたしの体から、力が抜けた」とありますが、なぜでしょうか。「わたし」と穂香のこれまでの関係や最近の二人の様子をふまえて答えなさい。

問い十、——線部⑩「そうして穂香に話してみると、ほんの少しだけ、気持ちが軽くなったような気がした」とありますが、この時の「わたし」のように、人に話をする事で自分の気持ちに変化した体験をあなたの日常生活から一つ紹介しなさい。ただし、三つの文にまとめること。

